

文学作品における派生形容詞「～っぽい」

萩原義雄

【凡例】

日本近現代文学の作品資料に用いられている「～っぽい」の語形を有する語を前後の一語文中を抜粋して、五〇音順に此等の語を採取した「～っぽい」一覧表にしてまとめてみたものである。今後、更に見出せることから、その使用状況をふまえておくことになる。

?五〇音順に当該語を太字にして記載し、次に「○」印を冠して一文抜粋の語用例を示した。

?その語用例の作者名および作品資料名を明記し、使用した底本の頁数及び行数を記載しておいた。

?巻末部分には、引用した参考文献資料の所在をこれも五〇音にして一覧にした。

【語例一覧】

藍っぽい

○秩父銘撰の藍っぽい羽織を着て、下は瓦斯絲らしい。[尾崎紅葉・多情多恨・前編三六⑰]

青っぽい

○青っぽいカンテラの光が揺れるたびにゴミゴミとした棚の一部や脛の長い防水ゴム靴や支柱に掛けてあるドサや裨天、それに行李などの一部がチラ、チラッと光って消えた。[小林多喜二『蟹工船』二四⑩]

○演説者は、青っぽいくすんだ色のセルに、黄色の角帯をキチンと締めた、風采のよい、見たところ相当教養もありそうな四十男であった。[江戸川乱歩『白昼夢』一一⑧]

○少し青っぽくなるかもしれないけど。[干刈あがた「黄色い髪」六八⑮]

○鏡で見ると、頬の腫れは引いていたが、直美の言ったとおり青っぽくなっていた。[干刈あがた「黄色い髪」七二②]

赤っぽい

○「赤っぽい、ひげの長いやつだろう」[安部公房『砂の女』二七⑧]

○寒いのに、コートは手に持ち、ジーパンに赤っぽいセーター着て、こっちがお葬式の準備してるのに、うろちょろして邪魔だったんだよ。[加賀乙彦『湿原』下・星一一九⑯]

○田舎だけではなく、フェズのような大都会でも、旧市街には赤っぽい灯りがポチポチ点くだけなんだ。[小川国夫『悲しみの港』六八]

赤茶っぽい

○史子に脱色の仕方を教えてくれた一人である彼女の髪も、明かりを吸って赤茶っぽく透けて見える。[干刈あがた「黄色い髪」二五六⑩]

垢っぽい []

飽きっぽい

○飽きっぽい彼は、三日目あたりになると、もう押入れの寝台にも興味がなくなって、所在なさに、その壁や、寝ながら手の届く天井板に、落書きなどをしていましたが、ふと気がつくと、ちょうど頭の上の一枚の天井板が、釘を打ち忘れたのか、なんだかフカフカと動くようなのです。[江戸川乱歩『屋根裏の散歩者』一五二⑧]

○……雪森厚夫という男の性格は、表面上は人当たりがよく、ちょっと理屈っぽいところが落ち着いて見え、初めは善人で学校の先生みたいに思われて信用されるのですが、元来飽きっぽく気が変りやすいのです。[加賀乙彦『湿原』上・閨三九二⑱]

悪っぽい []

浅っぽい[徳富蘆花「思出の記」]

汗っぽい

○家の中にも隣の家の話し声がどうかすると聞こえたりする。それは丁度動物同士肌をすり合わせる汗っぽい感じに似ていた。[大庭みな子『がらくた博物館』]

あだっぽい []

あだっぽい

○その人工の漆黒な眉は、小づくりな童顔の中で浮きあがっていて、まち子姐さんの面だちを実際よりもあだっぽくみせてしまう。[宮本輝『道頓堀川』五④]

仇っぽい

○「何だかまだ芝居に居るような気がして相済まないけど」とお糸さんが煙草を吸付けてフウと烟を吹きながら、「伯母さんの小言が台詞に聞えたり何かして、どんなに可笑しいでしょう」と微笑したところは、美しいというよりは仇っぽく、男殺しというのはいかような人を謂うのかと思われた。[二葉亭四迷『平凡』一三七③]

婀娜っぽい

○ここでは酒を般若湯という。然もそうした家の主人はというと、まだ二十二三歳の婀娜っぽい美人なのだから驚かされる。——[森銑三『明治東京逸聞史』趣味四一・六]

厚っぽい []

あぶらっぽい

○あたりにはサンダル、眼鏡、茶碗、箸などがころがり、あぶらっぽいような、淫らなような匂いがねっとりとよどんでいた。[開高健『夏の闇』一一六⑩]

脂っぽい

○私たちは毎日顔をあわせ、酒場の椅子に埋没して酒をすすりつつ、道をいく女たちの眼や腰を眺めて放埒な冗談をとぼして脂っぽく笑ってばかりいた。[開高健『夏の闇』八六⑨]

○ひねったり、つねったり、集めたり、こねたりして頬をのぞくと、中年男の顔は脂っぽくて蒼白いもやもやである。[開高健『夏の闇』九八⑪]

○ショーウィンドウというショーウィンドウは淵の暗さがあらわれるまで磨きこまれ、その奥で脂っぽい頬が閃いたり、ゆっくりと影がうごいたりする。[開高健『夏の闇』九三⑤]

○私は脂っぽい、大きな袋に封じこめられ、顔をねっとりした脂と汗で蔽われてソファかヤクの皮にころがっている。[開高健『夏の闇』九七⑬]

○タバコの吸殻などが刺さったりしている脂っばい肉や魚の冷めきった残飯からたちのぼってくるものであるはずだ。[開高健『夏の闇』一四六⑩]

○担架は血と汗と垢でずず黒く脂っぼく光り、厚布というよりはしたたかに使いこまれた革のような光沢で光っている。[開高健『怪物と爪楊枝』二四一⑧]

荒っばい

○結婚しよう。どんな大きな悲哀がそのために後からやって来てもよい、荒っばいほどの大きな歓楽を、生涯に、いちどでいい…… [太宰治『人間失格』一〇五②]

○ごく荒っばい形でなら、地球の皆さんも成功したようですが、複雑な構造をもった物質をいきなりつくり出す技術は、まだまだ無理なのでしょう。[安部公房『無関係な死』七二⑧]

○金光坊は生れてからこれほど荒っぼく自分の體を取り扱ったことはなかった。[井上靖『補陀落渡海記』五七三⑥]

○私はざっと一通り會場の八室を新聞記者らしい荒っぼさで廻って仕舞うと、再び、第五室に逆戻りして、その部屋の隅の方に陳列されてある“漆胡樽”と名札にかかっている異様な形しつこそんをした大きい器物の前に立った。[井上靖『漆胡樽』一三〇⑤]

暴っばい

○先刻番頭さんに云ふ通り、八右衛門と云ふ荷主が山口屋へ爲換を取りに往くと云ふから、さつきかわせ少しでもさう云ふ事を聞いちやア打捨ちやア置けねいから、暴っばい仕事だが頭で突いて毒うつちやつあらを服ませ、生空を遣つて此方の店へ來た所が、山出しの多助の畜生に見顯はされた上からは、のなまぞらやこつち私ア繩にかゝつて出るのは承知サ。
[三遊亭圓朝『鹽原多助一代記』一五〇上⑱]

わしや

あわれっばい○すなわち、世之介の質問に答えた飛子のアフレっばい身の上話もデタラメの作り話なら、それに対する世之介の、いや実は自分も金性なのだ、という返答も（遊びの席での、とっさの、つき合いの）嘘なのではなからうか？ [後藤明生『吉野大夫』一二五⑮]

哀れっばい

○家全体が、むりやり振じまげられたような、哀れっばい悲鳴をあげた。[安部公房『砂の女』五一②]

○仔犬は、つれて来られるまえから、かなり乱暴なあつかいをうけていたらしく、最初からいかにも哀れっばい悲鳴をあげていた。[安部公房『無関係な死』一四五④]

○二人とも繰り返して読んだ。ひどく哀れっばいゆう子である。[幸田文『きもの』三二八⑬]

憐れっばい

○「あんな憐れっばい事をお言いだがね、あれでもとはずいぶん酷かったんだよ」[夏目漱石『こころ』一四〇⑫]

いがらっばい[上司小剣「石川五右衛門の生立」]

○トウモロコシ葉からつくった紙で巻いた、いがらっばい塩漬の黒葉のタバコをふかしながらそれらを眺めていると、さめたばかりなのにまたうとうととしてくる。[開高健『夏の闇』六⑭]

○けれどもいま、ラムの甘い匂いとタバコのいがらっぽい霧のなかでは、別れた日の遠景が小さく見えるだけである。[開高健『夏の闇』九⑩]

○久瀬は汗にまみれて蚊帳のなかによこたわり、いがらっぽい黒葉の兵隊タバコに火をつけた。[開高健『岸辺の祭り』九二⑧]

○この街道は広大なメコン・デルタとサイゴンをつなぐ大動脈で、交通量がもっとも多く、朝から夜まで、どの時刻にもいがらっぽい排気ガスと人声にみたされている。[開高健『怪物と爪柳枝』二三六⑨]

○私はいがらっぽい兵隊タバコをふかしながら感動していた。[開高健『輝ける闇』六九⑩]

○いがらっぽい海水のなかを泳いでいるさなかによく冷えた真水をもらったようだった。[開高健『花終わる闇』五五⑦]

意地っばい[]

いたずらっばい

○彼女はいたずらっぽく微笑むと、あいつとふたりっきりになりたくないからだと言いました。[宮本輝『錦繡』四一⑭]

○早鐘の胸を隠して、アナはいたずらっぽく笑いました。[久美沙織『MOTHER』四三⑱]

○「いや、そうであったのですよ」大貫検事は能勢警視に、いたずらっぽく片目を瞑ってみせた。[加賀乙彦『湿原』上・闇四二四⑥]

○眼をいたずらっぽく輝かせ、のびのびと自身にあふれ、まるで舟のようにどっしりしている。[開高健『夏の闇』六四⑪]

○女はマーティニをすすって声にだして笑い、いたずらっぽく舌をだし、肩をすくめた。[開高健『夏の闇』二二九⑰]

○女は組んでいた手をほどいて何となくあたり一帯をさしてみせ、いたずらっぽく低い声で笑った。[開高健『夏の闇』二五八④]

○「あの橋の真ん中からこの店までの道を、マスターはいつも五十一から五十三までの間で歩いてくるんや」と邦彦がいたずらっぽく笑って言った。[宮本輝『道頓堀川』三五⑨]

○難波の地下鉄の駅の改札口の前で邦彦からリュックサックを受け取ると、由紀子はいたずらっぽく笑って、「こないだ、政夫さんからラブレター貰いましたん」[宮本輝『道頓堀川』二〇二⑩]

○彼女はいたずらっぽく微笑した。[川西蘭『ルームメイト』二六二⑰]

○真っ黒な虹彩がいたずらっぽくきらめいて、俺を映した。つやつやした唇が、にやっとうさい笑いを象り、気まぐれな猫みみたいな表情になった。[三浦しをん『神去なあなあ日常』五一かたど⑪]

悪戯っばい

○私は私の少々常規を逸した着物の選び方に、さすがのみどりさんも呆れなすったのだと思って、半ば悪戯っばい気持でわざと口を噤んで居りました。[井上靖『獵銃』四五⑬]

○マダムは唇に指を当て、悪戯っばい眼で微笑みかけ、「この時季になると、ムササビがやって来て、屋根裏に巣、つくるの」と言い、耳を澄まして、天井裏を走っている足音を聴いてみろと言う。[中上健次『軽蔑』]

○ここまで話した時、呉氏は悪戯っばい笑みを浮かべて私の顔を窺った。[倉橋由美子『月

の都』一五四⑬]

色っぽい

○なにか色っぽいことをはじめるのですよ。[江戸川乱歩『防空壕』三二八⑮]

○とてもそれとは勝負にならないまでも、なんとか少しは色っぽい返事がしたかったけれど生憎と信之には、全くなんの記憶も甦って来なかった。[多情仏心・初雪の夜、八九頁]

○「あら！」と寧ろ呆れた顔だったが、だんだんその色っぽい目のうちに、(まアこの人は、なんて子供らしいんだろう)とでも云った気持の、さも好もしげな笑(えみ)が浮かんで来た。[多情仏心・初雪の夜、九一頁]

○詳しい話はとうとう出なかったけれど、何か少しぐらい色っぽい場面もあったらしいから、その懐旧の情ですか。…… [多情仏心・楽屋、一〇〇頁]

○一体男でも女でも、大勢のなかへ出て、なんとなく人目につくって云うような人なら、きっと色っぽい話が多いものですが、紀尾井町さんは、どっちかと云やアくすんだ方でしょう？ [多情仏心・楽屋、一一七頁]

／一三二頁]

○彼はその男の風貌や人柄を想像して見て、通俗小説にでもありそうな一つの色っぽい出来事と場面を描いて見たりしていた。[徳田秋声『仮装人物』二五一⑫]

○(困っちゃうな、もっと色っぽくお化粧でもしたらいいのに……) [田辺聖子『風をくたさい』一四四⑥]

○色っぺ。宙太は心の中で叫ぶ。[山浦弘靖『星子宙太二人旅』二四③]

浮かれっぽい嘘っぽい○他人の眼から見れば、どこか嘘っぽいか、あるいは思い込みにとられていて承服しがたい硬ばったものだからであろう。[大庭みな子「自分のむづかしさ」]

うたぐりっぽい[]

海っぽい

○それから予想外に、海っぽいタッチがあった。[吉本ばなな『N・P』一〇〇⑧]

恨みっぽい

○女の気持のわからない剣持の顔を恨みっぽく見ながら、聡子は自分で言うしかない。「天藤さんに、身をまかせよと」[筒井康隆『朝のガスパール』七九]

浮気っぽい[]

えがらっぽい○黒い影は折れて故(もと)の如く低くなる。えがらっぽい咳(せき)が二つ三つ出る。[夏目漱石『虞美人草』二四五⑰]

Hっぽい

○「なんか変よ、あの二人。……うわあーHっぽい!!」[山浦弘靖『星子宙太二人旅』四〇④]

エロっぽい

遠慮っぽい

怒りっぽい

○しかし加世子は怒りっぽい庸三を、子供に直面させることを怖れて、いつも庸三を抑制した。[徳田秋声『仮装人物』二一④]

○ただ無暗に愚痴っぽく、怒りっぽくなり、なんでもないことに腹を立て怒って涙をなが

したりすることが、おかしいと云えばおかしく感じられる程度だ。[安岡章太郎『海辺の光景』九〇⑥]

○もっとも、怒りっぽくなっているのは父親も信太郎も、そうだった。[安岡章太郎『海辺の光景』九〇⑭]

幼っぽい[]

男っぽい

○埠頭の尖端を荒彫りに作った人形の立つ台も、男っぽいものであった。[芝木好子「面影」]

○それでいて男っぽい頼り甲斐のあるところなんかを見抜いているかしら [田辺聖子『風をください』六七②]

○「そうね、善良そうな小父さま。頑丈で男っぽくて……若いのね」[加賀乙彦『湿原』下・向日葵四二四⑥]

男の子っぽい

○「変なところが変に男の子っぽいのね。」[吉本ばなな『N・P』一六六⑫]

おとなっぽい

○ロイドのまだ中性めいて華奢な横顔に、フッとおとなっぽい翳が浮かんだのです。[久美沙織『MOTHER』三九⑦]

○妹尾由加子は、同年齢の女生徒と比べると、笑い方も、歩き方も足の組み方も、あらゆる点で垢抜けておとなっぽく見えました。[宮本輝『錦繡』三七②]

○ロイドはしばらくばちばち瞬きをしていましたが、きりりとあげた顔つきは、なんだか急におとなっぽくなっています。[久美沙織『MOTHER』一七二⑪]

大人っぽい

○いきなりこんなことをされるなんて、仲間なはずのロイドがやけに大人っぽい目つきになって自分を見るなんて、まったくショックです。[久美沙織『MOTHER』四三⑩]

○ただ元服した勘三郎が大人っぽく正月の挨拶をして侍を悦ばせた。[遠藤周作『侍』三九九②]

○「吉川の言葉が大人っぽくひびいた。」[三浦綾子『塩狩峠』六〇②]

お姉さんっぽい

○詠子はやっと落ち着いたらしく、お姉さんっぽい口調で聞いた。[干刈あがた「黄色い髪」別人ごっこ二八三⑪]

女っぽい

○ちょっとだけ女っぽいところがあるだけ。[宮本輝『道頓堀川』一八〇①]

○懐かしい印象だったが、前会ったときよりずっと、女っぽい迫力に満ちていた。[吉本ばなな『N・P』四〇⑪]

○女っぽいふりしたり、強かったり、弱小だったり、大げんかして声をからした後並んで月見たり、同じことしてるのに日によって感じたり感じなかったり。[吉本ばなな『N・P』一五三⑫]

○「あんたって女っぽい性格してんね。顔も女っぽいと思ったけど……」[山浦弘靖『星子宙太二人旅』四九⑰]

○「ひゃーあお久しぶり！すっかり女っぽくなっちゃって。近よりがたいっらないわ。」

[吉本ばなな『キッチン』一二七⑧]

ガキっばい

○私もすごくガキっばいとこあると思うけど……」[干刈あがた『黄色い髪』別人ごっこ二八六⑦]

餓鬼っばい

○こうした荒唐無稽な戦闘場面に遭遇し、武器を扱って敵をやっつけるなどという餓鬼っばい遊びは久々のことだ。[筒井康隆『朝のガスパール 45』朝日新聞一九九一年一月二日(月)付]

学生っばい

○というような学生っばい言い方はしないのである。[田辺聖子『風をください』二三五⑮]

隠れ家っばい

○しかしどことなく暗くさびれていて、隠れ家っばい感じがした。[吉本ばなな『N・P』九九⑩]

影っばい []

かしょっばい []

風っばい []

軽っばい[]

感じっばい

○おまえさんは感じっばい子だから、いろいろ思うだろうけれど、今お母さんは病人だからね。病人を相手にして、るつ子のほうが先に感じっばくになっていたんじゃ、話にならない。この着物も紐も、あしたはさらっと着せなければいけないよ。[幸田文『きもの』一四一⑥]

○るつ子は持前の感じっばさ、感覚の強さで、火の穴から這いあがろうとする脚に、ひらひらするものまつわる感じを想像し、そのおそろしさにふるえ、布裂(ぬのきれ)が皮膚へ残った考えると、胸ぐるしくなった。[幸田文『きもの』一五五⑦]

黄色っばい

○何しろ、胸はむかつくし、目の前にはなんだか黄色ッばいものがもやもやしているし、大苦しみの最中で、はっきりとは憶えてませんが、……そうですか、その時にあなたもいらしやったんですか」[多情仏心・初雪の夜、九〇頁]

○カサカサに乾いた黄色っばい肌、絶えず聞こえる軽いせき。[三浦綾子『塩狩峠』二五八⑩]

○黄色っばくつやのないまなざしを漁夫の上にじっと置いて黙っていた。[小林多喜二『蟹工船』一三⑰]

○壁は黄色っばく塗られ、塗料をすかして無数の落書があるのが分る。[加賀乙彦『湿原』上・壁四六二①]

キザッばい

○「高原のリゾートエクスプレス」というのだそうだが、そのキザッばい名に恥じないゴージャスな雰囲気は、ヨーロッパのリゾート列車の風格がある。[内田康夫『湯布院殺人事件』六七⑯]

気障っぽい

○それは可かったけれど、お酒飲みだすと、あの人の態度何だか気障っぽくて、私忿って廊下へ飛び出しちゃったものなの。＜葉子の会話＞ [徳田秋声『仮装人物』一四六⑮]

○ロイドは気障っぽく肩をすくめました。 [久美沙織『MOTHER』二五二⑬]

金属っぽい

○しばらくじっと眼をこらすと、どれもみな同じ、だいたいお皿をひっくり返したような形の金属っぽい物体であることがはっきりわかりました。 [久美沙織『MOTHER』一一一⑩]

ぐちっぽい

○これはぐちっぽい老人たちがあとで不首尾のときにいいがかりをつけてくることを防ぐ効果をもつはずだ。 [開高健『巨人と玩具』九六⑬]

愚痴っぽい

○ただ無暗に愚痴っぽく、怒りっぽくなり、なんでもないことに腹を立て怒って涙をながしたりすることが、おかしいと云えばおかしく感じられる程度だ。 [安岡章太郎『海辺の光景』九〇⑥]

くろっぽい

○アルバムをめくっていると突然、変にくろっぽい、陰影の濃い一葉の写真にぶつかる。 [安岡章太郎『海辺の光景』三四⑰]

黒っぽい

○小男は黒っぽい舌の先を、唇の端にかるくすべらせ、喉の奥でおかしそうに笑った。 [安部公房『無関係な死』二六⑭]

○黒っぽい荒れ海だが、水平線のあたりから白い帯が伸びて、川のように蛇行しつつ間近かまで来ていた。 [加賀乙彦『湿原』上・流水二八四⑪]

○橋を渡る。荒川にかかった千住新橋だ。むこう岸に、黒っぽい異様な建造物が見えた。 [加賀乙彦『湿原』上・壁五一六⑥]

○黒っぽい背広を着て頬と顎がひげで埋っている。 [加賀乙彦『湿原』上・壁五二六⑬]

○フケ性なのか黒っぽい法服の肩にフケが一つ二つ光っている。 [加賀乙彦『湿原』下・門三七二⑫]

○黒っぽい衣服を着た老人が壁にもたれて坐っていた。 [倉橋由美子『生還』一二三⑧]

○そうだったでしょ、といわれてもるつ子は答えられない、ぼんやりとゆう子は白っぽくて和子は黒っぽかった、とだけしか記憶がないのだった。 [幸田文『きもの』二二四⑯]

げすっぽい【下種一】

○そのむさぼりかたは夢中としかいいようがなく、たったいま無言のうちに自分の好みに人間を従わせてやったという下種っぽい自負など、どこにもあらわれていない。 [開高健『花終わる闇』四七⑧]

○あばずれの下司っぽい女たちしか知らなかった武内は、一見おきんそうに見えて、そのじつ言いたいことの半分も口に出せない、まだ娘っぽいところを残しているその女を好きになった。 [宮本輝『道頓堀川』四一⑩]

けちっぽい[]

煙っぽい[]

恋っばい

○若いうちは、なんでも恋っぼく考えがちだよ。[幸田文『きもの』三三九⑩]

ごそっばい

○ぐっと理解のいくものが出て、縫い直しのごそっばい銘仙より、お古でもしなやかな縮緬めいせんちりめんのほうがいいと思うが、素直にはなれなかった。[幸田文『きもの』五八⑫]

こどもっばい

○額に汗の玉、眼鏡が鼻の頭までずり落ちて、とてもこどもっばい顔ですけれど、言うことはしっかりしていました。[久美沙織『MOTHER』二七④]

○おまけに、ジョーのそばにいと、ケンがなんだか頼りなくこどもっぼく見えてしまいます。[久美沙織『MOTHER』二六五③]

子供っばい

○新宿の旅館から荷物を持こんで来た葉子は、その当時壁紙など自分で張りかえた下の部屋に落ちついて、窓に子供っばいカーテンを張り、二つの電球をもった、北海道時代から持ち越しの、例の仏蘭西製のスタンドも、こて／＼刺繍のある絹張りのシェイドに、異国の売淫窟を思わせる雰囲気を感じ出させるのであった。[徳田秋声『仮装人物』三一五⑩]

○津軽の北部に見受けられるような、子供っばい悪あがきは無い。[太宰治『津軽』一四六⑯]

○最初は、部落全体に火をかけてやるとか、井戸に毒を入れてやるとか、罌を仕掛けて、責任者を端から穴のなかに引きずり込んでやるとか、そんな直接的な手段で、もっぱら空想に鞭うち、自分をはげまして来たものだが、いざ実行の機会をあたえられてみると、そう子供っばいことばかりも言っていない。[安部公房『砂の女』一八二⑥]

○年若い西だけが子供っばいほどの好奇心をみせ、はじめての船旅に胸をはずませながら、私に船の構造や羅針盤の機能をたずねたり、エスパニヤ語を教えてほしいなどと話しかけてきた。[遠藤周作『侍』八〇④]

○「いい年をして子供っばいことをいってるわ。弁解にしても三流だよ。」[開高健『夏の闇』二四一⑰]

○彼らの陽気さ、多血質、おとなの体と子供っばい衝動。そんなことについて話しあったあげく人びとは彼らもまた遠からず畦道で撲殺される運命にあることをかぞえてみじめに自分を暗がりにむかって解放するのだ。[開高健『流亡記』二二八⑤]

○同年の友達が街中で群れ集っているのが、子供っばい、莫迦げたことに[加賀乙彦『湿原』下・寒郷一六六⑱]

○「随分、子供っばい……いや、失礼、変わった希望ですね。[加賀乙彦『湿原』下・門三八七⑳]

○ベッドのはしに腰をおろして手近の竿をとりあげてリールをまわしていた蔡は、写真と私を見くらべ、はじめてその眼から鋭さを消して子供っばい驚愕をみなぎらせた。[開高健『貝塚をつくる』一八七⑬]

○いつまでも子供っばい印象をあたえていた額は渋紙色に変わって深い縦皺がきざまれ、ゴム鞠のようにふくらんでいた頬を内側からすっきりえぐりとられたように凹んで、前歯一本だけをのこして義歯をはずされた口はくろぐろとホラ穴のようにひらかれたままだ。[安

岡章太郎『海辺の光景』一六②]

○子供っぽい表情で彼女は手を伸ばした。[吉本ばなな『血と水』]

○単純で子供っぽい奴みたいです。あんまり頭は良くないかもしれません。[久美沙織『MOTHER』一〇①]

○子供っぽい茶目っ気を感じて、彼女も思わず微笑を返した。[川西蘭『ルームメイト』二五⑦]

○「なによ、それじゃ子供っぽいってことじゃない」[山浦弘靖『星子宙太二人旅』三三⑩]

○私はホッとしながら、われながら子供っぽく思える言い方で、俺には行く手の自爆がはっきり見えた、だからこれは義務だった、俺は義務を果たした、と呟きながら、歩いていたのです。[小川国夫『悲しみの港』八七]

○顔を覗き込まれるほど、なおなお深く首垂れて、滝十郎は、子供っぽく二三度合点々々をうなだした。[多情仏心・初雪の夜、六三頁]

○「それがお友達ってものなの？」と女はつい誘われて子供っぽく言ったが、後はまた吐き出すように、「えらいと思うわ。よくそんなことが私にお頼めになれますわ。」[川端康成『雪国』一八⑥]

○「そう、変？あれが私の子供っぽさの最後のとりでだったんだろうけれど、あれを隠していることに酔いながら、街を歩いてたような気がして。」[吉本ばなな『N・P』一七〇⑰]

粉っぽい

○林檎畑があって、白い粉っぽい花が満開である。[太宰治『津軽』一五六⑩]

○家の近所の薬屋は、入口のガラス戸に黄ばんだカーテンを引いていて、中はいつも秋の夕暮れのようにひんやりしていた。そして粉っぽく乾いたにおいが満ちていた。[小川洋子『冷めない紅茶』一〇②]

五味っぽい

○それと同時に五味っぽいような、酸っぽいような、胸の悪い匂いが籠み上げて来て、目の前に緑色の輪が見えた。[森?外・『諸国物語』馬丁三六四②]

サーファーっぽい

○きっちりスクエアにスーツを着たひと、サーファーっぽく陽にやけたひと、カウボーイ・ファッションのひともあります。[久美沙織『MOTHER』二二〇③]

寒っぽい

ざらっぽい

○埃は北風にのって、うしろの駄馬隊へふりかかった。私は、堀口と交代していたので、照銀を牽いていたが、埃が眼に入って困った。口もざらっぽくなったが、常歩にうって私にはへとへとになった。[水上勉『日本の戦争』二六一頁]

○大黒屋とは較べるべくもない粗末な宿で、自分と同じ年恰好の小女が汲んでくれたすすぎの水で足を洗い、ふすまきしむ音のするざらっぽい階段を昇ると、襦仕切りの[津村節子『津村節子著作集』第五卷二〇六頁]

塩っぽい

しめっぽい

○こちらの隅にはりついているのは、しめっぽいベッドの中で、タバコの灰が落ちかけているのに、まだ薄目のまま身じろぎしようとしもない、裸のあいつである。[安部公房『砂の女』二二四⑬]

○「晩方は池の方はしめっぽうでございますね」と、アレクサンドラが云った。[森鷗外『諸国物語』馬丁三四二⑦]

○知の上の暗黒が次第に濃く、温かに、しめっぽくなって来た。[森鷗外『諸国物語』センツァマニ二四〇⑤]

○お客がしめっぽくなっちゃうでしょうね。[開高健『夏の闇』一五〇③]

○ふとんは、ますますしめっぽく、砂は、ますます肌にべたつく。[安部公房『砂の女』四一⑩]

○「こんな話ばかりじゃ、しめっぽくなっちゃうわ！ほんと」星子が叫んだ。[山浦弘靖『星子宙太二人旅』二一④]

湿っぽい

○鹿が少なくても五六疋、湿っぽいはなづらをずうっと延ばして、しずかに歩いているらしいのでした。[宮沢賢治『鹿踊りのはじまり』一一〇③]

○彼の今まで居た所は北向きの湿っぽい臭いのする汚ない室でした。[夏目漱石『ころ』二〇五⑮]

○彼は冷たい風の吹き通す土蔵の戸前の湿っぽい石の上に腰を掛けて、古くから家にあった江戸名所図会と江戸砂子という本を珍しそうに眺めた。[夏目漱石『門』一四四②]

○光沢のある髪で湿っぽく押し付けられていた空気が、弾力で膨れ上がると、枕の位置が畳つやの上で一寸廻った。[夏目漱石『虞美人草』五一⑤]

○とうとう上映時間の終了まで、バネのぬけた湿っぽい椅子の上に坐ったまま、動くことができずにしまった。[安岡章太郎『海辺の光景』九〇⑥]

○手はポケットの中の湿っぽい紙幣をにぎりしめながら、古い堀割にそって歩いて行った。[安岡章太郎『秘密』二〇三⑯]

○が、僕がつかみ出したのはあの湿っぽい紙幣ばかりだ。[安岡章太郎『秘密』二一〇⑮]

○真夏にしては光の衰えた空に鼠色の膜をかぶった臙物のような雲が低く垂れ込め、羊水のような海は暗く騒ぐ気配を見せて、その間を吹いてくる風はひどく湿っぽい。[倉橋由美子『獣の夢』五一⑫]

○急に、麻子は湿っぽい声を出した。[内田康夫『湯布院殺人事件』五二⑥]

○帝大農学部のすぐ脇のここら辺りは、二年前の震災で起こった火事からも運よく逃れ、明治のころの落ち着いた家々の佇まいがしっとり残っているとされているが、ほんとうのところは、家の床から天井まで年中湿っぽくて、風通しも悪く、その上あたしには、この建物が坂下へ向っていくらか傾いているように思われてならない。[久世光彦『蕭々館日録』頁下⑲]

378 ○小さな無人駅で、ホームに降り立つと空気が湿っぽく寒かった。[三浦しをん『神去なあなあ日常』一五⑫]

○あ、話がそれたな。俺とヨキと繁ばあちゃんは、湿っぽい空気のなかを家に戻った。[三浦しをん『神去なあなあ日常』一五五④]

じゃがらっぽい []

少女っぼい

○由加子の机の上には、電気スタンドと小さな木箱、それに陶製の人形がひとつ置かれていて、私はいまでもそれらのどこか少女っぼい配置を思い出すことがあります。[宮本輝『錦繡』四一⑤]

少年っぼい

○昨日のどんよりした濁りや、こわばった石灰質の殻はどこにもなく、すこし少年っぼい体つきはそのままだけど、会釈ぶりはもう娘ではなかった。[開高健『花終わる闇』五八⑫]

○彼女は淡々としたそぶりで、しかしとらえようのない執拗さをこめて一箇ずつとりだし、カーペットへ順々に並べていった。少年っぼい、とがった、白い裸の尻の割れ目から漆黒の毛の穂さきをちらつかせつつ彼女があちらこちらと歩きまわる姿には、悪戯の精のようなところがあったが、とうとう部屋の床が眼鏡で足の踏み場もなくなってしまった。[開高健『花終わる闇』六五⑦]

素人っぼい[]

白っぼい

○この男の白っぼい顔や黄いろい髪と、死だのなんのと云う、深刻な、偉大な思想とは、いかにも不吊合いに感ぜられたからである。森鷗外・『諸国物語』死三〇二⑩]

○海女の裸身が、底の方にある時は、青い水の層の複雑な動揺のために、そのからだがるで海草のように、不自然にクネクネと曲がり、輪郭もぼやけて、白っぼいお化けみたいに見えるが、それが、スーッと浮き上がってくるにしたがって、水の層の青さがだんだん薄くなり、形がハッキリしてきて、ポッカリと水上に姿を現わすその瞬間、ハッと眼が覚めたように、水中の白いお化けが、たちまち人間の正体を暴露するのである。[江戸川乱歩『押絵と旅する男』二八一⑦]

○がそこへ、突然、花火でも打ち上げた様に、白っぼい大空の中を、赤や青や紫の無数の玉が、先を争って、フワリフワリと昇って行ったのでございます。[江戸川乱歩『押絵と旅する男』○ふと南の浦のほうを見たら一羽の鴨が白っぼい胸をみせて低く舞っていた。[中勘助『島守』一〇八⑨]

○トラックがまきあげる埃のために、紳士服御用と書いたペンキも、ショオウインドオの硝子もすっかり白っぼい。[遠藤周作『海と毒薬』四②]

○白っぼい、ふわふわする球形の心が針の山に乗り、傷つけられ血を流している。[加賀乙彦『湿原』上・闇三八一⑫]

○ただ一つ残っているのは、多年の風雨に木材の白っぼくささくれた、ささやかな鐘楼ばかりである。[江戸川乱歩『もくず塚』三六四②]

○帽子のない頭は毛が薄くて白っぼく、それが日焼した顔に特殊な帽子をかぶせたようで愛敬があった。[加賀乙彦『湿原』上・流水二九二⑤]

○唇を固く結んだレオの顔は、そそけ立ったような頬が白っぼく、艶を失くしている。[森茉莉『枯葉の寝床』一九〇⑮]

○木目が黒く浮き上がって、低いところは白っぼくけばだっている廊下は、人が歩くたびにみしみし言ったりしている。[森茉莉『ボッチチェリの扉一〇⑦』]

○分厚く層になった部分は、擦れて白っぼくなりツヤを失っているが、そのまわりには濡

れたままのような光沢のある個所をのこしている。[安岡章太郎『海辺の光景』七〇⑦]

○そうだったでしょ、といわれてもるつ子は答えられない、ぼんやりとゆう子は白っぽくて和子は黒っぽかった、とだけしか記憶がないのだった。[幸田文『きもの』二二四⑩]

○三好が故意と足もとをひよろつかして立ち上がりながら、「どうしても、門弟何の某だな。わざ白っぽい袴の下から向脛を出してる輩だな」[尾崎紅葉『多情仏心』初雪の夜、七一頁]

てあい○私たちはかなり忙しく汽車に乗ったり降りたりして、その地方特有の白っぽい砂地の上に秋の陽の散っている、何處となく海に近い感じの播磨、備前の小さい驛々に降り立っては、ノはりまートに書き込んである生前の桂岳の謂わばパトロンであった舊家、素封家を一軒一軒経廻ったのであった。[井上靖『ある偽作家の生活』一八七⑧]

皺っぽい[]

煤っぽい[]

砂っぽい

○夏の終りの午後の光の中で、東大の赤い煉瓦と、砂っぽい舗道とが乾いている。[森茉莉『日曜日には僕は行かない』二五一⑥]

戦争っぽい

○もともと、こんな乱暴っぽい、戦争っぽい雰囲気は好きじゃありません。[久美沙織『MOTHER』二六五①]

先輩っぽい

○少年野球チームでも、だんだん先輩っぽくなって来るじゃん。[久美沙織『MOTHER』一八二⑩]

俗っぽい

○雪森厚夫と結婚の話などしたことがなかったし、それを母に対して口にするだけで、結婚という言葉が、ひどく俗っぽい響きを帯びてきたからだ。[加賀乙彦『湿原』下・門四〇九②]

それっぽい

○わあん、ないない。鞆の中身くらい整頓しておいてよお。あ…さわった…それっぽい…あった！」[久美沙織『MOTHER』四九⑦]

探険っぽい

○私は言った。「探険っぽいわ。」[吉本ばなな『N・P』一四七⑥]

茶色っぽい

○三人とも化粧をしていて、一人は髪が茶色っぽい。[干刈あがた『黄色い髪』夏休み五九③]

茶っぽい

○茶っぽい色をした、濃い周囲のぼやけた眉である。[森茉莉『ボッチチエリの扉』]

○妙に茶っぽい顔付で風采あがらぬのはいいとして、勤務態度がよい加減、とくに時間を守らないのが、親弁たる彼の気に触っていた。[加賀乙彦『湿原』下三六四②]

○艶のある茶っぽい髪が、犬が臥た跡の草むらのように、なっている。[森茉莉『恋人たちの森』八〇⑬]

○仲間の少年といたずらにペイ煙草をやったために、茶っぽい瞳の中の黒褐色の瞳孔が、

どこか夢みるように定まらないところがある。[森茉莉『枯葉の寢床』一六九⑩]

ちゃらっぼい

○チャラっぼい男にぼっかなぜか惚れちゃうわたし……何度も泣いた心配だった他のどこかに行かないで♪～〔つんく作詞「浮気なハニーパイ」2003年7月15日発売〕

中年女っぼい

○ちょっと中年女っぼい抑揚でいい、それもいやらしい拗ねてひがんだ。[田辺聖子『風をください』二八⑪]

艶っぼい

○脱顔子少しもひるまず、古今獨歩一流の艶ッぼい所を聞てからの御評判、浪花節ごとき野鄙のものにあらず、歌は八宗兼学の妙文句、サア初まったり／＼。[幸田露伴『日ぐらし物語』四四①]

○無論小六よりも御米の方が年上であるし、又従来の関係から云っても、両性を絡み付ける艶っぼい空気は、箝束的な初期に於てすら、二人の間に起り得べき筈のものではなかった。[夏目漱石『門』八九⑥]

○二人とも私に比べると、一時代前の因襲のうちに成人したために、そういう艶っぼい問題になると、正直に自分を開放するだけの勇気がないのだろうと考えた。[夏目漱石『ころ』三五⑩]

○何気ないらしいが、胸の苦悩が現れた、白眼に剥いた鋭い眼が偶然陳のいる辺りに止められ、唇じりは上ったままのギランのひどく艶っぼくもみえるかおに、陳は狼狽え、吃りながら、「宝石の御用はどうぞ、今まで通り……」ギランははっと気がついたように、陳の顔に焦点を当てた。[森茉莉『枯葉の寢床』一八五④]

露っぼい[]

逃避っぼい

○「ちょっとゴシック調で、うんざりするようなシリアスさで、ロマンチックで、逃避っぼくもあり。結局、染ったものとしては咲のアプローチが一番まともじゃないかしら。」
[吉本ばなな『N・P』九七⑨]

毒っぼい[]

とっぼい

○いいかげんあことをいっているぜ、雪がとけてみたら木がまる裸になってたんでびっくりしたなんてトッポイことをヌケヌケ書いている。[開高健『パニック』三二⑥]

ドラマっぼい

○「～ドラマっぼいのと、おもわせぶりなのは苦手なんだから。」[吉本ばなな『N・P』七〇⑬]

夏っぼい

○「もう、夕空が夏っぼいわね。」咲が言った。[吉本ばなな『N・P』四一⑨]

涙っぼい[]

苦っぼい

○味が舌先から苦っぼくなってきたが、栄養をつけたいという一心で最後の一滴まで飲みこんだ。[加賀乙彦『湿原』上・闇三七〇⑫]

濁りっぼい

○夜来の雨に潤った新緑の鮮やかな庭木が、きら／＼光って、底ふかい空の青さにも翳し
がなかったが、心臓の弱い庸三はいつもこう云う場合の癖で、ひどく濁りっぽい気持にな
っていた。[徳田秋声『仮装人物』二一八⑭]

濡れっぽい []

鼠っぽい

○両耳が押し曲げられるほど深く阿弥陀に被り、鼠っぽい厚羅沙の、やっと膝まであるか
ならしやしの外套（オーヴァ）に、やや流行おくれの空色がかった背広を着た美少年だっ
た。[里見とん『多情仏心』一二一頁]

熱っぽい

○郊外のホテルの或る一夜その物狂わしい場面を思い出す前に、庸三は或日映画好きの彼
女に誘われて、ちょうど其日は雨あがりだったので、高下駄を穿いて浅草へ行く時、電車
通りまでの間を、背の高い彼女と並んで歩くのも気がひけて「僕は自動車に乗りませんか
ら」と断って電車に乗ってからも、葉子が釣革に垂下りながら先生々と口癖のように言
って何かと話かけるのに辟易したことだの、映画を見ているあいだ、そっと外套の袖の下
をくぐって来る彼女の手に触れたときの狼狽だの、或日ふらりと彼女の部屋を訪ねると、
真中に延びた寝床のなかに、熱っぽい顔をした彼女がいて、少し離れて座った庸三が、今
にも起き出すかと待っていると、彼女は赤い毛の肌著だけで、起きるにも起きられないこ
とが漸と解って照れているうちに、畳のうえに延べられた手に顔をもって行くと、彼女は
微声で耳元に「行くところまで……」とか何とか言ったのであったが、彼はそういう風に
して悪戯半分に彼女に触れたくはなかった事、一夜彼女が自分が果して世間でいうような
悪い女か何うかの判断を求めるために、初めから不幸であった結婚生活の破滅に陥った事
情や、実家からさえも見放されるようになった経緯、それに最近の草葉との結婚の失敗な
どについて、哀訴的に話しながら、止度もなく嗚咽いた後で、英国の或る老政治家と少女
とのロオマンズについて、彼女独特の薔薇色の感傷と熱情とで、恰かもぼっと出の田舎も
のの老爺に、若い娘がレビューをでも案内するような塩梅で長々と説明して聴かした事な
ども思い合されるのであったが、或日の午後彼はふと原稿紙やペンやインキを折鞆につめ
て、差当っての仕事を片著けるために、郊外の其のホテルへ出ようとして、ちょうど遊び
に来ていた葉子を誘ってしまったのであった。[徳田秋声『仮装人物』二七⑯]

○さき子は闘牛そのものにはなんの興味も抱かなかったが、毎日の紙面のそうした紙面企
畫の中に、津上の冷たいが、それでいて熱っぽい憑かれたような眼を感じることができた。

[井上靖『闘牛』八三⑰] ○凶暴なものがふとちらつくことのある彼の眼の底に、熱っぽ
い人懐っこさが隠れているのを、由里は見付けていた。[森茉莉『ボッチチェリの扉』一
三⑱]

○熱っぽい蒲団の中で彼の頭にうかぶのは、実行には決してうつらないさまざまな自殺の
方法や、それについての夢のような考えばかりだった。[安岡章太郎『海辺の光景』五六
⑲]

○いかにそれが真剣な熱っぽい思いであったにしても、私はまだ十四歳の子供でしかなか
った。[宮本輝『錦繡』三七⑳]

○家全体が疲労の色に包まれ、日常生活のあらゆるディテールは混沌として、無秩序にく
つつき合いながら重苦しく、熱っぽく流れて行った。[安岡章太郎『海辺の光景』七七㉑]

○案の定、翌朝は少し熱っぽく、のどが痛んでいた。[川西蘭『ルームメイト』七四④]

○この場合も桑島之獨特の話術の熱っぽさに半ばあおられた形で、「見たいね、邪魔でなかったらその日連れて行って貰おうか」と私は言った。[井上靖『玉碗記』一六六⑤]

ねむっばい[]

ノイローゼっばい

○「ちょっとノイローゼっぽくなるときがあったでしょ、全員が。」[吉本ばなな『N・P』二一⑧]

腹立ちっばい

ひがみっばい

○そうひがみっぽくではこまるわねえ。[田辺聖子『風をください』一三④]

僻みっばい

○彼は自身の子供じみた僻みっばい魂情を、いくらか悔いてもいたが、兎角苦悩と煩いの多い此の生活を、一気に叩きつけるのも、彼女に新しい恋愛もまだ初まっていない、こんな時だという気もしていた。[徳田秋声『仮装人物』二一九②]

○「ところで、細君の実家はどこだったかな」「紀州の新宮だ」「佐藤春夫と同郷か。僻みひがっばいだろ」迷々さんは、人の話をはぐらかすのが趣味である。[久世光彦『蕭々館日録』三八〇上⑫]

皮肉っばい

○真子は皮肉っぽく言い、人形に打ち込んでいる夏は炎暑にも気付かなかったほどなのにと思った。[芝木好子『面影』]

○「礼には及ばぬ。かねて申した通り、ただ当方も大船を造るからには望みがある」と白石さまは皮肉っぽく笑われた。[遠藤周作『侍』三七⑩]

○「もともと人間どもには大したことなんかできはしません」とヘルメースは皮肉っぽく笑って言った。[倉橋由美子『発狂』八三⑰]

○ロイドの唇が皮肉っぽく震えます。[久美沙織『MOTHER』三〇四⑧]

秘密っばい[]

ピンク色っばい

○スノーマンの教会の部屋では、ベッド・カバーだってカーテンだってピンク色っばい生地を使っていました。[久美沙織『MOTHER』一五八③]

不機嫌っばい

○膨らんだ唇を小生意気に結んで、不機嫌っばい顔で譲次をみてゐたのが[森茉莉『或殺人』]

不良っばい

○その眼は不良っばい、気の無いものを浮べて、傍見をしてみた。[森茉莉『恋人たちの森』]

○私より少し背が高く、ふつうのショートカットの髪で、紺色のダッフルコートを着た子で、不良っぽくは見えなかった。[干刈あがた『黄色い髪』二〇三②]

○梨枝の眼がパウロに還った時、パウロはナフキンで唇を拭いていたが、不良っばい、気の無いものを浮べて、傍見をしていた。[森茉莉『恋人たちの森』一一八③]

ブルースっばい

○少しカントリーがかったかわいい部屋、もしくはブルースっぽい乾いた部屋、このどちらかだろうと歩きながら推測した。[吉本ばなな『N・P』九九⑥]

勉強の虫っぽい

○ひとりっ子で、勉強の虫っぽくて、かなり、おかあさんっ子だったからね。[久美沙織『MOTHER』三二四⑤]

変なひとつっぽい

○馬締は変なひとつっぽいから、真面目そうでいて案外キレやすいかもしれない。[三浦しをん『舟を編む』一九六頁2]

保護者っぽい

○保護者っぽいあなた。[吉本ばなな『N・P』一九七⑩]

ほこりっぽい

○ビルの設計に関する私の交渉相手、総務部長、製本のいい古本のような男、角ばっていてほこりっぽい男。[安部公房『無関係な死』一二〇②]

○私は、ある場末の、見るかぎりどこまでも、どこまでも、まっすぐにつづいている、広い、ほこりっぽい大通りを歩いていた。[江戸川乱歩『白昼夢』九⑩]

埃りっぽい

○店に入ってみると埃りっぽくもなく、垢じみてもいず、開店してあまり時間がたっていないらしい気配である。[開高健『珠玉』一一九⑪]

埃っぽい

○私は埃っぽい丸善の中の空気が、その檸檬の周囲だけ変に緊張しているような気がした。私はしばらくそれを眺めていた。[梶井基次郎『檸檬』一四⑭]

○勿論あたりはトラックの往來が繁く埃っぽい感じなのですが、この川に沿って上って行くと、妙に平和な隠やかな印象を受けるのです。[井上靖『川の話』三六二③]

○けれど格子からのぞいてみると、薄暗く埃っぽい闇のなかに、ひげを土まで垂らした関羽が稚拙に怒ったまなざしで佇んでいた。[開高健『岸辺の祭り』一一八⑥]

○千メートル林道は、埃っぽい。車がちょうど擦れ違えるくらいの幅で、車に出会うと腹が立ってしまう。[後藤明生『吉野大夫』一一四⑤]

○こゝは水に臨んでいるというだけでも、部屋へ入った瞬間、誰でもちょっと埃っぽい巷から遠ざかった気分になるのであったが、庸三達には格別身分不相応というほどの構えでもなく、文学にもいくらか色気のある小夜子を相手に無駄口をきゝながら、手軽に食事などしていると、葉子事件に絡む苦難が、いくらか紛らわせるのであった。[徳田秋声『仮装人物』一四三⑪]

○白く粉をふいた黒い肌をふるわせて立っているゴム長靴、埃っぽいラシャ地の上にウジャウジャとでたらめに置かれながら同じ時刻に針を指しうごいている時計の山、そのとなりには、魚の卵、タクワン、樽の中にぶつぶつ泡をふいて澱むイカのハラワタ、……そんなものに僕は蹴つまずきそうになるのだが、何ひとつ僕に呼びかけてはこない。[安岡章太郎『秘密』二〇四⑰]

○そして店店の飾窓には、いつもの流行おくれの商品が、埃っぽく欠伸をして並んでいるし、珈琲店の軒には、田舎らしく造花のアーチが飾られて居る。[萩原朔太郎『猫町』]

○そのうえ窓が書棚でふさがっているものだから、ひといきれと大量の紙が発する埃(ほこ

りっぼさとインクのおいとが混じりあって空気が淀(よど)んでいる。[三浦しをん『舟を編む』二九八頁8]

骨っばい

○骨っばいからだをボキボキ鳴らしながら降りてきたのは、白い眉、白い髭、見るからに元飛行機乗りのかっこうをしたおじいさんだったのです。[久美沙織『MOTHER』一二六⑭]

○私利私欲のためではなく、是々非々の筋を通して自己の主張を枉げない骨っばい人物が、土佐から輩出している。[萩谷朴『おもしろ奇語辞典』三〇上⑤]

○司書は、背の高い痩せた中年女性だった。皺だらけで骨っばい指には不似合いの、ローズ色のマニキュアが生々しく光っていた。[小川洋子『冷めない紅茶』七四①]

ほれっばい

○地体浮気で男にほれっばい女だとは知らないから、わたしも始めての晩、御用さえ済めば別にはなしのある訳もなし、急いで帰ろうとすると、「兄さん、お願いだから、もう一度お目にかゝらせてね。」と寝乱れ髪に憂いのきく淋しい眼元。袖にすがっていきなり泣き落としと来たんだから、こたえられません。[永井荷風『あぢさゐ』] ○本当にいつになっても星子のほれっばい性格は直らないようだ。[山浦弘靖『星子宙太二人旅』三八②]

惚れっばい

本当っばい

○なにも知らないみきさんが加わったことで、芝居は格段に本当っぼくになった。[三浦しをん『神去なあなあ日常』二八二③]

まじっばい

みじめっばい

○ふざけない！おいらあ人間だい！どんなにみじめっぼくたっていためつけられたって



おいらあ人間だぞ！人間だぞ！人間だぞ！バカヤローツ
[手塚治虫『どろろ』頁] 26

水商売っばい○踊り子になって三か月目の頃、今は別のトップレス・バーに移った悠子たちと店の踊り子五人で香港へ食べ歩きの旅をしたり、熱海や大島に一泊旅行をよくしたが、取りまとめ役の悠子が他所に移ったし、残りの踊り子の出身がクラブやキャバレーのホステスだったので、電車の中も旅館に着いてからも話題は水商売っぼく歌舞伎町のクラブのママの話や客筋の品定めに終始し、あげく出かけていった熱海の温泉宿の芸者たちから、「お客さんたち、おミズでしょう」と言われ、真知子や順子は鼻白んだ。[中上健次『軽蔑』朝日新聞連載一九九一年三 25 月九日 (土)]

水っばい

○その水っぽい鼻声は、男をまぶしがらせた。[安部公房『砂の女』一九七④]

○肉の入っていない、水っぽいカレーライス。実にカレーライスの多い所だ。[加賀乙彦『湿原』上・壁四七三⑥]

○影に細い手と足がついたといたくなるような枯れかただが、穢れた壁にもたれたところを見ると、青い瞳が薄れて水っぽくなり、淡い輪郭の線がのこっているだけである。[開高健『珠玉』九〇⑬]

○あちらこちらに水っぽい贅肉のついた、ぶざまに腹のせりだした初老の体をそのかたわらによこたえる。[開高健『珠玉』一四六③]

未亡人っぽい

○何でだか未亡人っぽく見えた。昔から、そういう外見をしていた。[吉本ばなな『N・P』一三三⑩]

むかっぽい[]

娘っぽい

○その娘っぽい眼や頬にのぼる哀傷を見て久瀬は頹れる冷酷をおぼえ、はげしく踏みこんだ。[開高健『岸辺の祭り』九二④]

○あばずれの下司っぽい女たちしか知らなかった武内は、一見おきやんそうに見えて、そのじつ言いたいことの半分も口に出せない、まだ娘っぽいところを残しているその女を好きになった。[宮本輝『道頓堀川』四一⑫]

○敷居際で三つ指ついて、「いらっしやいませ」とお辞儀をする様子は、いかにも日本的で落ち着いてみえるけれど、視線を上げると瞳がキラキラ輝いて、娘っぽさがおの見えるような、陽気で少しやんちゃな感じもする女性だった。[内田康夫『湯布院殺人事件』七八⑫]

咽せっぽい

○どうも咽せっぽくて実に弱った。[夏目漱石『吾輩は猫である』]

紫っぽい

○紫っぽい錦紗である。[田辺聖子『風をください』二五七①]

無理っぽい

○「やめてくれよ。縁起でもない」ロイドが、少々無理っぽい声で笑いました。[久美沙織『MOTHER』八八⑩]

瞑想っぽい

○「無心にね……読経とか瞑想っぽいのかな。」[吉本ばなな『N・P』一三八①]

やくざっぽい

○管理人が留守を伝えると居留守にちがいないとさんざん嫌味を言い、約束を破ったとかなんとか、思いっきりやくざっぽい調子でわめくのだ。[安部公房『無関係な死』一七九⑮]

○無理矢理やくざっぽい品を作ろうとしているようだった。[宮本輝『道頓堀川』一九④]

安っぽい

○「ワハハハハ。そうよ、この蓋はあまり安っぽいようだな」と和尚はたちまち余に賛成ふたおしようした。[夏目漱石『草枕』九]

○宗助は次の間にある垂鉛の落しの付いた四角な火鉢や、黄な安っぽい色をした真鍮の菓

鐘や、古びた流しの傍に置かれた新し過ぎる手桶を眺めて、門へ出た。[夏目漱石『門』一五〇⑫]

○安っぽいくらいあたりまえに哀しい、内面の物語を。[吉本ばなな『N・P』一五二⑬]

○言葉って安っぽい。[吉本ばなな『N・P』一九六⑩]

○「この男、『小説を自分の頭の中で映画を撮るようにして読む』というとんでもない男で、まあ最近そういう読み方で充分という小説がたくさんあるからこれはいいとして、そういう読み方をした時、パーティ・シーンにリアリティがない、登場人物に動きが少ない、安っぽい書き割りしか浮かんでこないなどと難癖をつけはじめた。[筒井康隆『朝のガスパール』一〇三]

○「楽屋に対する興味」などと云う言葉が、安っぽく考えられた。[多情仏心・前編八、三七頁]

易っぽい

○其の晩の舉動なり、…………あの餘り…………貴方の前ぢやけれどもが、風采の上らん、?せそばんきよどうあまあなたまへふうさいあがやた、薄鬚のある、背の屈んだ、恸う、突くとひよろひよろつとしさうな、人に口を利くにおどうすひげせかがかつひとくちき?する、初心らしい、易っぽい、容子と云ふのがぢやね、人品備はらんですぢやらうが、何うしよしんやすようすいじんぴんそなどですかね、…………きやッ、きやッ、きやッ。」空咳きに咳入る如く、肩を揺つて高笑ひをする。からせせきいごとかたゆすたかわら [泉鏡花『日本橋』二〇九⑩]

幼稚っぽい

○こんな幼稚っぽくなってしまった髪に、せめて、小さな花のいくつかくらいオトメチックに飾りたい。[久美沙織『MOTHER』七一③]

汚れっぽい[]

乱暴っぽい

○もともと、こんな乱暴っぽい、戦争っぽい雰囲気は好きじゃありません。[久美沙織『MOTHER』二六五①]

理屈っぽい

○…………雪森厚夫という男の性格は、表面上は人当たりがよく、ちょっと理屈っぽいところが落ちて見えて、初めは善人で学校の先生みたいに思われて信用されるのですが、元来飽きっぽく気が変りやすいのです。[加賀乙彦『湿原』上・闇三九二⑱]

○それはパーティというより十八世紀のサロンか平安朝の宮中の花の宴か、あるいはアテナイ人のシュンポシオンのようなものだなと麻衣子さんが理屈っぽいことを言ったはずはないので、そんな風に木原氏の想像が勝手に働いただけのことかもしれない。[倉橋由美子『幽霊屋敷』六三③]

○そこで飛び出すことになっている。何事も理屈っぽく、数学的に物を考える末造が為めには、お常の言っている事が不思議でならない。[森鷗外『雁』八〇⑭]

○理屈っぽく言えば、地球ぐらい大きくなれば、もう三次元の世界じゃなく、本当は四次元の世界で、その形を目で見るように想像すること自体がもう不可能かもしれないのだ。

[安部公房『無関係な死』五四⑨]

ロリータっぽい

○「単にロリータっぽいっていうんじゃないかって、おしまいの方なんて、薬やお酒のせいなのか、ものすごく幻想的でしょう？」[吉本ばなな『N・P』三一④]

忘れっぽい

○「ハハハハまさか、それほど忘れっぽくもならないでしょう」と寒月君が笑うと、[夏目『吾輩は猫である』]

○女はすかさず、「そんな忘れっぽい人に、いくら実をつくしても駄目ですわねえ」と嘲けるごとく、恨じつあざうらむがごとく、また真向から切りつけるがごとく二の矢をついだ。[夏目漱石『草枕』九] まつこう

○「あいつは、過去のことをよく覚えてないんで、言うことがふわふわ変り、つまり根は忘れっぽいんであります。努力して覚えようとしたとこだけ、記憶しちよる。アリバイ工作のあとで歴然で」[加賀乙彦『湿原』上・閨三九二⑱]

○私はいそいでいた。「忘れっぽい小説家ですよ、私は」スン氏はいたずらっ子のように微笑した。[開高健『飽満の種子』一六〇⑫]

○忘れっぽいモズがあちらこちらの枝につき刺した子ネズミの死骸に彼は眼を奪われたのだった。[開高健『パニック』二三②]

○「そんな風に云われちア恥入りますよ。……一体あたしは忘れっぽい質のところへもって来て、何しろ旧いはなしですからね。……どうもすみません」[尾崎紅葉『多情仏心』初雪の夜、八九頁] ○「どうしてあたしはこう忘れっぽいかな」[尾崎紅葉『多情仏心』初雪の夜、九一頁]

《参考文献》

安部公房砂の女 [新潮文庫]、無関係な死・時の崖 [新潮文庫]

泉鏡花日本橋（「日本橋」大正三年九月十八日発行・名著復刻全集近代文学館）

井上靖獵銃 [名作自選日本現代文学館・ほるぷ出版]

鬮牛 [名作自選日本現代文学館・ほるぷ出版] 漆胡樽 [名作自選日本現代文学館・ほるぷ出版]

玉碗記 [名作自選日本現代文学館・ほるぷ出版]

ある偽作家の生活 [名作自選日本現代文学館・ほるぷ出版]

川の話 [名作自選日本現代文学館・ほるぷ出版]

補陀落渡海記 [名作自選日本現代文学館・ほるぷ出版]

内田康夫湯布院殺人事件 [中央公論社]

江戸川乱歩屋根裏の散歩者、押絵と旅する男、防空壕、もくず塚 [ちくま日本文学全集・筑摩書房〇一九]

遠藤周作、侍 [新潮文庫]

遠藤周作、海と毒薬 [新潮文庫]

小川国夫悲しみの港 [朝日新聞社]

小川洋子冷めない紅茶 [ベネッセ]

海燕一九九〇年五月尾崎紅葉多情多恨 [岩波文庫]

開高健、夏の閨、巨人と玩具、歩く影たち（飽満の種子、岸辺の祭り、怪物と爪柳枝）パニック・裸の王様、花終わる閨 [新潮社文庫]

開高健、珠玉 [文藝春秋]
加賀乙彦湿原 [上・下] [朝日新聞社]
梶井基次郎檸檬 [新潮文庫]
川西蘭ルームメイト [集英社文庫]
川端康成雪国 [新潮文庫]
久世光彦蕭々館日録 [雑誌「中央公論」一九九九（平成一一）年月号]
11 久美沙織 MOTHER [新潮文庫]
倉橋由美子 倉橋由美子の怪奇掌篇（発狂、幽霊屋敷、獣の夢、月の都） [新潮文庫]
幸田文きもの [新潮文庫] 一九六五（昭和四〇）年「新潮」幸田露伴日ぐらし物語 [岩波文庫]
後藤明生吉野大夫 [中公文庫]
小林多喜二蟹工船 [岩波文庫]
里見弴多情仏心 [岩波文庫]
三遊亭圓朝鹽原多助一代記 [明治文学全集・筑摩書房]
10 太宰治、人間失格 [新潮文庫]
太宰治、津軽 [新潮文庫]
田辺聖子風をください [集英社文庫]
筒井康隆朝のガスパール [朝日新聞社]
津村節子津村節子自選作品集・第五卷 [岩波書店]
手塚治虫どろろ [手塚治虫漫画全集二]
徳田秋声仮装人物 [講談社文芸文庫]
中上健次軽蔑 [朝日新聞社]
中勘助島守 [岩波文庫]
永井荷風あぢさゝ [中央公論、昭和六年]
夏目漱石吾輩は猫である [複製]
夏目漱石、門 [新潮文庫]
夏目漱石、虞美人草 [新潮文庫]
夏目漱石、草枕 [新潮文庫]
夏目漱石、こころ [ちくま文庫]
萩原朔太郎猫町干刈あがた黄色い髪 [朝日新聞社]
三浦綾子塩狩峠 [新潮文庫]
三浦しをん『神去なあなあ日常』 [徳間文庫 2012 年] 水上勉日本の戦争 [新日本出版社]
三浦しをん『舟を編む』 [光文社文庫二〇一五年刊]
宮沢賢治注文の多い料理店（鹿踊りのはじまり） [新潮文庫]
宮本輝道頓堀川 [新潮文庫]
宮本輝、錦繡 [新潮文庫]
森?外雁 [新潮文庫]
森?外、諸国物語 [上下] [筑摩文庫]
森茉莉恋人たちの森（ボッチチェリの扉、枯葉の寝床、日曜日には僕は行かない） [新潮文庫]

山浦弘靖星子宙太二人旅 [集英社]
安岡章太郎海辺の光景 (秘密) [新潮文庫]
吉本ばななN・P [角川文庫]
吉本ばなな、キッチン [福武文庫]
吉本ばなな、血と水 []

▲[上部へ](#)

▲[「言葉の泉」のページへ](#)

◎[「情報言語学研究室」のページへ](#)